

氏名	保崎 佑
ヨミガナ	ホザキ ユウ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博第 18 号
学位授与年月日	2023 年 3 月 10 日
学位論文題目	モルツィン伯爵に仕えた音楽家によるファゴット協奏曲 ーヴィヴァルディ、ファッシュ、ライヒェナウアー、イラーネ クの比較研究ー
博士論文審査委員会	（主査） 教授 工藤 重典 （フルート） （副査） 兼任教授 水谷 上総 （ファゴット） （副査） 教授 武石 みどり （音楽学） （副査） 教授 藤田 茂 （音楽学） （副査） 土田 英三郎 （音楽学） （東京藝術大学名誉教授）
博士演奏等審査委員会	（主査） 教授 工藤 重典 （フルート） （副査） 兼任教授 水谷 上総 （ファゴット） （副査） 教授 荒井 英治 （ヴァイオリン） （副査） 教授 岡田 敦子 （ピアノ） （副査） 准教授 星 洋二 （声楽） （副査） 教授 藤原 豊 （作曲） （副査） 教授 武石 みどり （音楽学） （副査） 岡本 正之 （ファゴット） （東京藝術大学准教授）

審査結果の要旨

1. 博士論文審査委員会

日 時	2023年2月6日(月) 17時10分～19時40分
場 所	東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパス C305
判 定	合格とする
審査結果の要旨	<p>本研究は、従来ほとんど詳細が知られていなかった18世紀前半ボヘミアのヴァーツラフ・モルツィン伯爵とその宮廷楽団、そしてそこに様々な形で所属した4人の音楽家たちに着目し、近年発掘された作品を含めて彼らのファゴット協奏曲を可能な限り全て取りあげ、それらのリトルネロ形式楽章の詳細な様式的比較研究を試みたものである。</p> <p>まず、作曲家ヴィヴァルディとボヘミア地域を中心に活動したローカルな作曲家たちを対象とする比較研究という着眼点が秀逸である。音楽史の記述では触れられてこなかった分野であるが、主たる先行研究(チェコ語)を読み解き、その研究成果をわかりやすく紹介することによって、当時国際的な大作曲家であったヴィヴァルディとモルツィン宮廷楽団の地元の作曲家たちとの関係が明らかにされ、ヴェネツィア/ドレスデン/プラハ/ウィーンといった諸地域どうしの政治的・音楽的関係についても示唆された。この点で、18世紀におけるファゴット文化の解明に大きく寄与する足掛かりとなる研究であり、学術的・音楽的意義を十分に有するものとして評価できる。</p> <p>予備審査の段階で指摘した問題点のうち、多くはかなり改善された。特に、先行研究についての理解が足りなかった点を解消することにより、「先行研究を批判し異なる見解を提示する」ことから「先行研究で示されなかった様式的特徴の詳細を明らかにする」ことへと論文の目的を変更したことは、論文の結論との整合性を高めるうえで有益であった。</p> <p>他方、楽曲分析の方法については、分析表の書き方、分析表(付録)と本文との関係づけ、リトルネロ主題とソロ主題の詳細な分析、分析に用いる用語に加えて、比較考察においてどのように評価項目を設定するか、曲数の点で圧倒的な違いのある対象をどのように有効に比較するかといった点で、さらに熟考と改善の余地が残された。</p> <p>以上のような問題点はあるものの、本論文においては、ヴィヴァルディ作品において多様な特徴が見られること、他の3人の作曲家においてはさらに独自の特徴が見られ、形式・書法・独奏楽器の音型のいずれにおいても多彩な作品が量産されたことが示され、ボヘミアのファゴット協奏曲がもつ豊かさ、つまりは、ひとつの様式記述に還元できないような多様性が浮き彫りにされた。このような作品群が生まれたモルツィン伯領とドレスデンとの関係を問い直すなど、地理的な広がりをもってこの時代のファゴット協奏曲を再考し、そこに大きな光を当てたことは、博士研究として十分な価値を有し、博士の学位を授与するにふさわしいものと考えられる。</p>

2. 博士演奏等審査委員会

日 時	2022年7月23日（土）18時00分～19時20分
場 所	東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパス TCM ホール
判 定	プログラミング、演奏ともに大変優れており、審査員全員一致で合格と判定した
審査結果の要旨	<p>普段ほとんど名前を耳にすることのない18世紀初頭のボヘミアの作曲家たちと、彼らの作品に共通するファゴットパートに与えられたヴィルトゥオジテイの両面に焦点を当てた学位審査演奏会。</p> <p>結果は、どちらの魅力も存分に味わうことのできる出色の演奏会となった。</p> <p>審査委員からはバッハ、テレマン、ヘンデル等が活躍していた同じ時代に、このように個性的で多彩な音楽を作る作曲家がボヘミアで活動していたことは驚きであるし、中央ヨーロッパの音楽家の層の厚さと豊かさを再認識させてくれたことは称賛に値するとのことであった。前半のヴィヴァルディよりも後半のライヒェナウアーとイラーネクのほうが作品として完成度が高く、聴きごたえがあったという意見も出た。このように審査委員がボヘミアの作曲家たちに好感を持つことができたのは、以前からその啓蒙に取り組んできた保崎佑の献身的な演奏の賜物であろう。</p> <p>今回のファゴットの演奏に関しては、審査委員一同絶賛の嵐であった。「一晩に4つの協奏曲を演奏すること自体、管楽器の世界では稀有なことで、周到的な準備は勿論、その体力、集中力には頭が下がる」という意見を皮切りに、どの審査委員からも超絶技巧の見事さ、装飾音の鮮やかさ、レガート時の音の豊かさと美しさなどが感想として述べられた。バロックスタイルでの演奏も、きちんと様式に則っており審査委員の満足いくものであったが、緩徐楽章の時に少し表現が単調になると、弱音で演奏する時のテンションがもう少し密であればという指摘もあった。また、配布されたプログラム冊子に誤植があったことは残念であった。これからの参考にしてほしい。</p> <p>研究者としてだけでなく将来、間違いなく日本のファゴット界を背負って立つ第一級の演奏家になるだろう、そんな事を予感させてくれる学位審査演奏会であった。</p>

以上